



Title	産業行動学の研究方法について
Author(s)	樋口, 伸吾
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1978, 4, p. 209-237
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8432
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

産業行動学の研究方法について

樋口伸吾

産業行動学の研究方法について

I 問 題

次に引用する文章は、産業行動学の第一人者狩野の言葉である¹⁾。

「私が、作業実験というものについて疑問をもちはじめたのは、コンベア作業の実験を計画したとき、被験者にどんな作業をやらせたらよいか、という問題であった。実験の目的はコンベア作業における一連続作業時間や休憩時間の適当な長さを実験的に決めようということであった。ところが被験者に行わせる作業が、現場の作業とあまりかけはなれていないと、結果を現場に適用できない、というのはわかりきったことであった。従来この種の実験には、しばしば加算作業が用いられているが、加算作業と組立作業ではあまりにちがいがすぎる。だいいち加算作業というものの心理学的性質や心的負荷の程度がはっきりしていない。したがって現場の作業との関連が理論的にもつけ難い。けっきょく私はどんな作業を考えても、現場のコンベア作業を実験的にシミュレートすることは不可能であって、このような作業実験は全く無意味であることを痛感した。なぜこんな冗戯に類するような実験を大のおとながやらねばならないのか、という暗然たる気持になったことを今もって忘れることができない。

この文の中で、狩野は、現場におけるコンベア作業をシミュレートして行う実験の無意味さを概嘆しているのであるが、ある局面における透徹した考察の結果は、常に一般的な意味をもち得るがゆえに、彼の反省はさらにきびしい問題にわれわれを導びくのである。すなわち、コンベア作業のみならず産業行動全般におけるシミュレーション実験は、はたして意味ある実験であり得るのであるかという疑問である。そして、それはさらに深刻な問題を惹き起す。すなわち、いわゆる心理学実験なるものが現実に行動している人間を解明するために、そもそもいかなる意味をもっているのかという問題である。

これらの問題は、明確な形で論議されたことが少なかった。Wundt 以来、心理学における実験はひとつの聖域であって、実験的手法は他の文科的諸科学の経験主義的、文献的研究方法に対して一段と優位にたつことは自明のことと信じられてきたからである。狩野の提示した問題は、この自明性の信仰に対する痛烈な疑念にはかならない。

ここで、狩野の「暗然たる気持」を手掛りとし、産業行動学の分野における実験、特にシミュレーション実験の意義を探求してみたい。そして、「このような作業実験は全く無意味である、ならば、それに替わるべき、現実の事態を把握する方法について考察を進めたいと

思う。そうすると、道はおのずから二つの方法にわかれよう。ひとつは、彼の提示したシミュレーション実験の問題点を徹底的に追求することであり、他のひとつは、それとは対蹠的な立場に立つことである。後者は、ひとくちでいえば、現場への没入である。例えば、Simone Weil や鎌田慧が実践したように、みずからひとりの労働者として工場に勤務し、外部の光にあてにくい場所を内側から記述するという体験的な方法がこれにあたる。

このように極度の客観化をめざすシミュレーション実験と、極度の主観的体験を軸とする実践的立場の両者を考察し、そこに、産業行動学の方法を反省することが、本論文の目的である。

II シミュレーションとしての実験

狩野の「暗然たる気持」を身にこたえながらも、わたくしは産業行動学の実験室にコンベアを設置し、「兎戯に類する」実験を開始したが、それからほぼ2年になる。その最近の成果の一部を次に示すが、これをシミュレーション実験とみなす限りにおいては、狩野の指摘はまことに正確であると思われる。

実験で被験者（いずれも女子学生3回生）が行う作業は、簡単な包装作業である。すなわち、13個の小さい立方体の木片を包装箱に色彩別に所定の通り格納し、ガラス板つきのふたをし、これを包装紙で包装する作業であって、熟練者は40秒程度で1個を完成させることができる。

作業条件は、規制作業と自由作業とにわけられる。前者は、1個あたり完成時間が40秒となるように、材料がコンベア上を流れてくる。もっとも、手をのばし、それを取り上げる場所には若干の遊びがあるので、完全な規制作業とはいえないが、作業遂行に作用する拘束性と強制性とはきわめて強い。後者においては、最初の作業は前者と同じ条件で行われるが、被験者は横におかれた二つのボタンを操作することによって、5秒間隔で流れの速さを自由にはやくしたり、おそくしたりすることができる。作業中、あらかじめ示されている20項目の感情表から、該当項目を応答するやりかたで作業感情の測定が20分ごとに行われた。また、20分おきにフリッカー値の測定が行われた。

結果は第1、2図の通りである。

両者とも、最初の20分間は、コンベアの流れによって材料が手許にくるまでの待機時間があるので、包装個数が少ないが、それ以後の20分ごとの作業量は規制作業の場合平均して26～27個である。また自由作業の場合、Aはあまり速度を変換させなかったが、Bは相当数それを変換させている。しかし、5秒という時間は40秒の約12%であるから、その変換数はそれほど大きい作業量の変動としては表われていない。それでも、後半の作業量は、両者とも

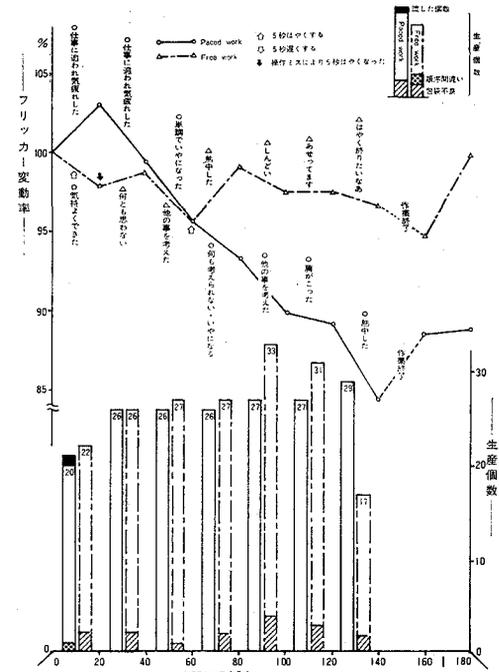
相当の変動を生じさせている。

もっともきわだった現象は、フリッカー値の変化の状態であって、ことにAにおいてはそれがいちぢるしい。規制作業の場合Aのフリッカー値は、20分後、約3%の上昇をみた後、ほとんど直線的に下降を続け、-15%をこえた点までその状態が継続された。そして、休憩後もその値は停滞したままであった。それに反し、自由作業の場合は、フリッカー値に若干の下降はみられたけれども、ほぼ平衡がたもたれ、休憩後ただちに開始時の値に復帰している。感情状態も、前の条件下に比べ、より明るい感情が多くみられる。

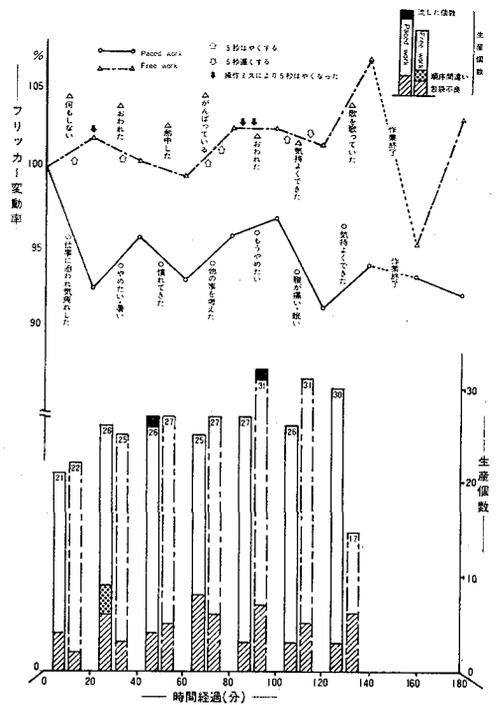
Bの場合は、若干状況がことなり、フリッカー値は、ことに自由作業の場合、ほとんど全部の場合が、開始時の値をうわまわっている。そして巨視的にみると、自由作業のほうが、規制作業よりも疲労その他負の影響が少ないと結論してもよいようである。感情状態もほぼこれに応じた推移を示している。

また、包装不良については、Aの場合その大部分が自由作業において出現したことが注意される。

心理学の初心者や、結論を急ぐ現場管理者ならば、この小実験から、自由作業のほうが規制作業に比べて、疲労が少ないうえに作業能率は高いと判断するかもしれない。少なくとも、そういう作業仮説をたてることが可能であ



第1図 ベルトコンベアによる作業経過 その1(被験者A)



第2図 ベルトコンベアによる作業経過 その2(被験者B)

験者C、Dともまず自由作業を行い、2週間後に規制作業を行ったのである。そして、その結果からは、前の実験で述べた結果とはほぼ同じ所見が得られたのである。

この第二実験の結果は、先にのべた「仮説」をさらに確実にさせるように思われる。もっとも、被験者は、C、D2人とも、初めに行った自由作業のほうが「きつかった」と口を揃えていった点に、作業への *Bereitschaft*²⁾ に関して問題が残されてはいるが。

おそらく、こういう実験の積み重ねが、現実のコンベア作業のシミュレーション実験として意義のある結果を生むであろう——こういう見解をもつのはたやすい。しかし、狩野の投げかけた疑問は、まさしく、こういう実験計画法に基づいて多くの実験を行い、その結果に分散分析、多変量解析等を実施し、統計的に疑問のない結果を提示すること自体が、生産現場における作業の実態に適合する実験といい得るかという問題であったのである。そして、わたくしの実験結果を考えてみても、彼の疑問はまさしく産業行動学の根本問題をついているように思われる。

狩野と同じく、Murrell も *Ergonomics* における諸実験の妥当性について強い疑問をなげかけている³⁾。しばらくわたくしの行った実験を、それがシミュレーション実験であると想定し、彼の提示した6ヶ条にわたる問題点について吟味してみよう。

1 目的とする事項に対して、実験方法に適切性を欠くこと。

Murrell は Sleight の実験をその例としてあげている。Sleight は、タキストスコープに、5個のダイヤルを0.25秒で次々と提示し、実際に使用するべきダイヤルの最適の形態を調べようとした。しかし、Graham は、0.5秒の提示の場合は、その形態の差は消失すると報告しているし、Murrell 自身も、被験者が目盛りを正確に読むためには、平均1.2秒が必要であることを確認しているので、Sleight のような実験は無意味であると述べている。

わたくしの実験で使われた包装作業も、実際の作業のシミュレーションとしては特に現実的な意味をもってはいない。このような作業は、工場内の作業としてはほとんどが自動化されている。そして、実際に行われているコンベア作業では、動作がもっと細分化され、例えば1ヶ所にハンダ付けを行うとか、ナットを強く締めつけるとかいう単純作業に分化している場合が多い。しかし、われわれの実験室は、こういう簡単な反応をベルトコンベアでとりあつかうには狭すぎる。そこで、40秒程の作業を課して実験を行ったのであるが、こういう比較的短時間の作業であっても、被験者の意識の中では、積み込みと包装という二つの作業がいろいろな形で交叉している。これをより細分化するのは可能であるが、少なくとも上記の作業を行った限りにおいては、Murrell の指摘があてはまることを否定できない。

2 術語の曖昧性

Murrell の指摘をまたず、わたくしは実験を行いながら、術語とはなんと不正確なものであるかと思いつけていた。例えば、それは規制作業という言葉自身に表われる。規制という

からには、作業自体に一定のテンポがなくてはならない。しかし、現場の作業にせよ、実験の場合にせよ、作業ミスが頻出するようでは、作業そのものの意味が失われる。したがって、そのロスを防ぐため、おのずと一単位作業における最低限の時間単位が設定される。そこで、作業時間には、秒単位、もしくは $\frac{1}{10}$ 秒単位であっても、必ず若干の余裕が生じているはずである。これを徹視的にみると、規制作業という言葉は、拘束性はきわめて強いけれどもある程度作業者の自由がみとめられる作業を意味してしまうことになる。こういう術語の曖昧性が、結論を歪めやすいことは容易に考えられる。

3 不適切な被験者

Murrell は、Brownと Slater, Hammel たちが、反応潜時は末端の反応の複雑性には影響されないと述べているが、Griew によれば、それは若い被験者のみに通用するという事例をあげ、適切な被験者を得ることの重要性を説いている。わたくしの実験では、被験者は学生であるが、学生という実験協力を要請される立場にある被験者から生じた結果を、労働者一般に適用できるかという、それは大きな問題であろう。このことは、別の論文⁴⁾で論じたので、ここでは、問題を指摘するにとどめる。

4 結果の誤った提示

普通、心理学の実験結果は平均値をもって示される。しかしこの方法では、いずれの資料も、時間の経過とともにパフォーマンスが低下することが当然のような感じを与えることになりやすい。しかし、第1～4図を一覧するだけでも、平均値だけを問題とすることの無意味さが明白であろう。したがって、わたくしはこれらの実験において、平均値を求めたり、また、多変量解析や、信頼度の算出を行ったりする意志を最初からもっていないかった。

5 実験室内におけるパフォーマンスと実際の労働状況におけるパフォーマンスの相違

Murrell のあげる例は、単純であるが示唆に富んでいる。彼は、Buckner の報告した英国海軍の日常生活における一挿話を引用する。それは、レーダーのディスプレイ監視に際して、ミスが発見されればビール一杯をかけると約束した場合の例である。その場合、たった一杯のかけでミスが全然起らなかったということである。ビール一杯でも実験状況はことなってくる。まして、実生活の基盤としての労働現場で働く作業者を、学生という被験者においてシミュレートすること自体がおかしいのである。

6 練習の不十分な被験者

Murrell の指摘を待たず、被験者は、実験の開始時において、作業能力についてあるプラトーに到達していなければならない。しかし、先に引用した論文⁵⁾に述べた諸事情のために、わたくしはこの問題を解決し得なかった。そしてまた、たとえその問題が解決されたとしても、次に述べる問題が残っている。すなわち、完全に習熟段階にある被験者においては、作業速度が標準よりはやくなったり、おそくなったりすることは、方向こそことなるが、ひと

つの完成した *Bereitschaft* を崩壊させるという点において、ひとしくマイナスの要因となるのではないかという問題である。この間の事情は、次章で説明する。

以上のように、わたくしの実験を現場におけるコンベア作業のシミュレーション実験と考えて、Murrell の示唆に基づきその欠陥を批判していけば、この実験がほぼ無意味に近いことに疑問の余地はない。狩野に「冗戯に類する」と酷評されてもしかたがないのである。しかし、わたくしがあえてこの種の実験を行ったのは、狩野とは別の視点からであった。それを次節に述べよう。

III 現実認識の視座設定の基盤としての実験

ここで、ひとまず、現場の作業の実態に戻ってみよう。

ある電機工場では、テレビの組立作業がコンベアで行われる。その作業は、約20秒の間に部品の結線を行う動作である。その本質は、完全な単純同一反覆作業である。またある自動車工場では、同じくベルトコンベアによる組立作業によって自動車を完成させているが、自動車の種類に応じ、22秒とか18秒という一定の作業時間が作業者に課せられている。

これらの作業速度の決定は、労務管理者の頭を一番悩ます問題である。そして、その決定に際しては、Taylor の時間研究、Gilbreth 夫妻の動作研究、Quick のワーク・ファクター法などは現在も生きている。そして、経営のための産業心理学における基本的研究テーマのひとつとなっている。その現実の成果として、例えば、ソニーの SST (Sony Standard Time) をみてみよう⁹⁾。トランジスター・オーディオの組立工程では、「トランジスターの足6本を36秒、コンデンサーの足13秒で30本」という「もっとも合理的、な」最低作業時間が計測されている、という。これらの規制時間は、いずれも企業が慎重に研究し、実験し、現場の労働者たちからの反応をも考慮にして決定したものであろう。その実態は、企業秘密に属するので把握するのは困難である。しかし、少し考えるだけでもそこには多くの問題があることは確実である。例えば、テレビの組立という作業は、たしかにほぼ同一内容の単純作業にわけられる。とはいえ、ひとつひとつの作業を微細に調べていけば、結線の材料の長短、結線部位の困難度、それに伴う作業姿勢等から考えて、所要時間に若干の相違は必ず存在するはずである。それらの微差を同一と仮定し、もしくは、最大所要作業時間を基準とし、M.T.M, W.F. 法等の技術をつくして作業時間が設定されるのである。しかし、そのゆえにこそ、そこに若干のゆとりがみられる結果の生ずる可能性がある。しかし、その微差は、工場の経営能率からして簡単に無視されてしまう。そして当然のように企業の論理によって動作に必要な単位時間が決定されてしまう。そのため、作業者たちには、その作業遂行に際し、時間的にも動作的にも規格化される必要が生ずるのである。そこで、現実に行われる作業は、

管理者自身が、`自分が今もしこの作業をやれといわれ、作業するとするならば発狂してしまうでしょう、`というほどの単純かつ高速度の、しかも自分の固有のテンポからはずれた性格をもつ一連続動作のセットと化してしまうのである。

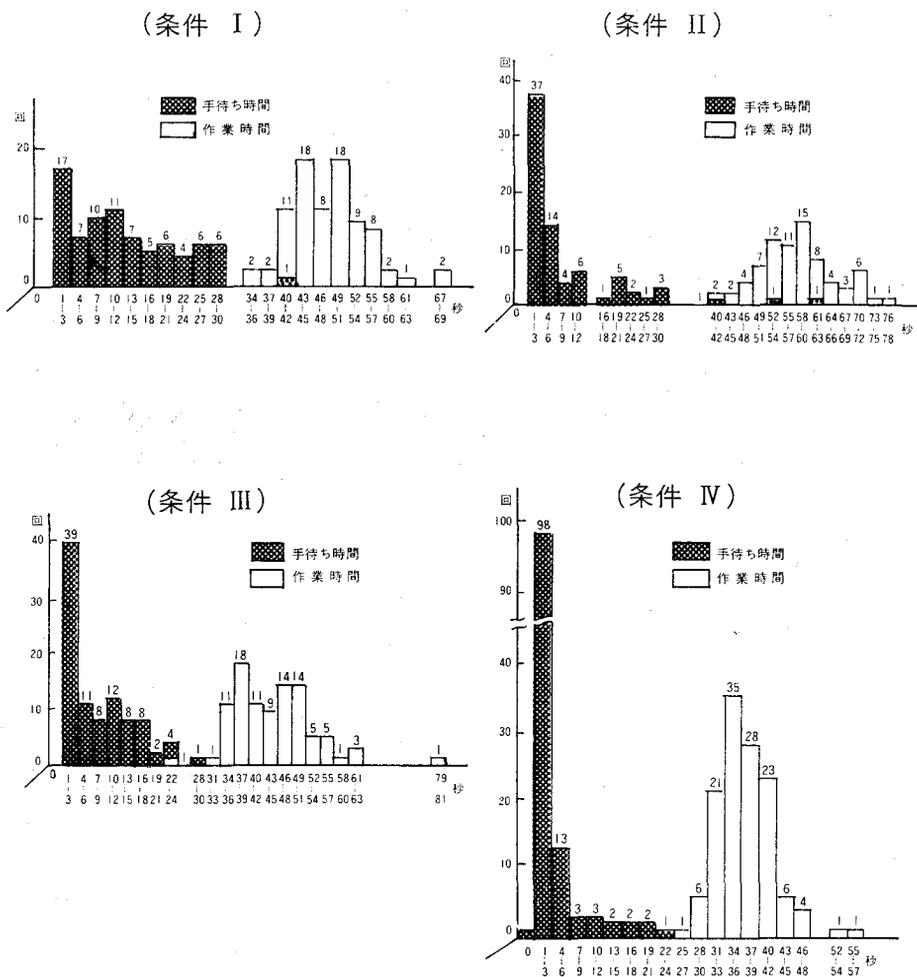
これに慣熟するためには、自我意識を完全に捨てた機械への隷属が必要になる。その失われた人間性回復手段として、企業が採用しているのはほとんど例外なしに、提案制度である。現にある企業では年間実に20万件、他の企業では5万件に達する提案が行われている。なかには、1人一年200件の提案をする労働者もいる。しかし、ここに人間性の回復をみるよりも、彼らの作業が囚人労働に酷似していることをみとるほうが自然であろう。例えば、СОЛЖЕНИЦЫН の「収容所群島」における郵便箱の管理をみればよい⁷⁾。囚人たちはいろいろの発明を提案できるのである。こういうきびしい条件下にいただけに、作業者には常に一定の慣熟した *Bereitschaft* が成立しているのである。この *Bereitschaft* はきわめて強固である。例えば、ある電機工場で不況のため作業速度を半分に落し、さらに大規模な休暇制を実施した時に、現場で起った声は、`1週間のうちせめて1日でもよいから、最高スピードで作業させてください、`という願いであった。

この現実の事態は、産業行動学者のシミュレーション実験に際して、まず、第一に重視しなければならない。Murrell の述べるように、実験者は、実験にとりかかる前に、被験者の作業能力がひとつのプラトーに達することを要請する。しかし、この到達したプラトー自体が、ひとつの *Bereitschaft* の成立を意味しているのである。したがってこの状態にある被験者にいろいろと作業条件を替えてみても、それは被験者にとって *Bereitschaft* を崩す作用しか与えない場合が多い。Murrell はこの点を見逃している。彼だけではなく、多くの実験者はその存在を無視してしまって、作業条件を操作的に規定していけば、作業はその規定された条件に応じた心的機制のもとで行われると考えてしまう。これは完全な錯覚である。

わたくしは、かつて、「再生と再認」という論文の中で、再生法を用いれば被験者は再生し、再認法を用いれば被験者は再認するという錯誤を指摘した⁸⁾。また、いくつかの論文^{9)・10)}の中で、例えば言語能力テストを与えれば被験者は言語因子を活動させて反応し、空間能力テストを与えれば、いわゆる空間因子を作用させ応答するという妄想を指摘した。

わたくしの行った別の実験の結果¹¹⁾も、この間の事情を説明していよう。この実験は、被験者が、先の包装作業において1個あたり60秒で楽にできる習熟に到達した時点において行われた。そして1個あたりの作業速度の速さを、条件Ⅰ 60秒、Ⅱ 70秒、Ⅲ 自由、Ⅳ 40秒とした。その結果の一部分は第5図の示す通りである。

この図でみると、4条件により作業の行われかたを規定してみても、規制作業を与えた場合には、`被験者は極力その規制に対し自由な作業速度を得ようと、意識的・無意識的に行動する、`ことがよくわかる。そして、わたくしは、ほかの資料を参照し、条件Ⅲの自由作業



第5図 作業時間と手待ち時間の分布

の本質を次のように論じた。『ひとくちにいうと、条件Ⅲは、規制作業に対する自由作業という性格のものではないのである。それは、ほとんど条件Ⅰ、Ⅱ、Ⅳと同一の規制作業に、自己調節とは呼ばれるけれど、真の自己調節とは無関係に近い、しかも、心にひっかかる大きな課題を与えられた作業に変換しているのである。』

結局、実験室内においてはとにかく作業条件を替えてみても、学生という立場の被験者の *Bereitschaft* が労働者の慣熟とことなって『意識的・無意識的な自己調整』となっている場合には、作業条件の変化は特に決定的な重要性をもち得ないことが多い。

この事実を無視した実験を繰り返してみても、狩野のいう『暗然たる気持』を味わうにとどまるばかりである。

しからは、わたくしの実験は、いかなる意味をもち得るのであろうか。ひとくちでいえば、それは、現場の作業の性格の認知する場合の視座を洗練する目的をもっていたのである。比喩的にいえば、`児童、のうちにも、成人の行動を解明するなにものががあるという立場に立って行われたのである。もちろん、成人の行動や思考の分析から児童のそれをみなおすことも重要であるが（ほとんどの児童心理学者は後者を無視しているのは不思議である）。しかし、シミュレーション実験を行う多くの実験者たちは、現場における事実を実験室で再生産していると安易に考えており、事実をみることの困難性をほとんど意識していない。わたくし自身さえ、`事実から始めよ、と学生諸君にいう場合が多い。`工場の中、作業現場、そこにつきぬ学問の基盤がある、と。

しかし、この言葉を述べるたびに、わたくしの頭の中にひらめくのは、次の文章である。それは、自分では科学的であると信じながら、科学的方法の意味を充分わきまえていない人びとの`まず事実から始めよ、という空疎な叫びに対して Cohen¹²⁾ の述べた言葉である。

`実際の科学的手続を省察したこともない人びとが、まず事実から始めよというのは、たやすいことである。しかし、もっと根本的な困難がわれわれの事実^にに立ちだかっている。そもそも、事実とは何であるのか——事実の確立こそまさしく科学者の研究の目的ではないか。それが科学の端緒ないしは第一段階にすぎないというならば、その他の段階は省略してしまったまま済ますこともできるであろう。事実を科学的に確定することは、長期間にわたる労なくして報いられることの少ない企てである。それというのも、事実はしばしば近づきがたいばかりでなく、われわれが事実としているものは、多くの場合、まったくの錯覚であるからである、。

そして、この`まったくの錯覚、を正しい認知に導びく手段として、心理学の実験は、ふたたびその地位を回復するのである。コンベア作業の例に戻ってみよう。

コンベア作業を論じる場合、ほとんどといってよいぐらい引用されるのは、Chaplin の`モダンタイムズ、である。彼がベルトコンベア作業によって精神病へと転落する一コマはまさしく迫真的な傑作であった。その迫真性が、逆にベルトコンベア作業にひとつのイメージを与えてしまった。その弊害は、Kretschmer の体型による性格論を抜きにして、性格を論じられないというおそろべき性格論の現状に匹敵しよう。

われわれの実験のひとつの結果である第5図は、このような固定観念を打ち破るものである。例えば60秒で作業を行い得る作業者に70秒の作業時間が与えられる場合、作業の速度の変更はまず主作業の包装作業時間の延長によって行われる。しかし、その主作業も、われわれが想定したように包装作業のみにあるのではなく、被験者の意識では、時には積み込みがそれに当たっている場合もある。被験者は作業の経過に応じ、これらの位置を交替させている。そして、手待ち時間に余った時間のしわ寄せがくることは稀である。こういう点につい

ての研究は、まだ開始されたばかりである。しかし、今述べた状況を、実際の作業の管理者に再三述べたにもかかわらず、それに気付いている人はひとりもいなかった（第Ⅴ節参照）。おそらく、われわれの実験がさらに進むにつれ、コンベア作業の本質をより深く探索する道が開かれるであろう。そして、そのひとつは、かくも少数の被験者にかかわらず現実に表われてくる個人差の問題であろう。

今まで述べてきた事情を、もっと日常的な例で説明してみよう。

わたくしは、テレビで相撲の放送をみるたびに——いや聞くたびにというべきか——勝負の決まり手を執拗に解説するアナウンサーの声に辟易していた。その道の素人がたまさかのひまつぶしとして観戦する時には、単純な勝敗以外に興味をもち得ないのが自然であるからである。しかるにアナウンサーは、自分で決まり手がわからない場合には、相撲のプロである解説者へ克明にその決まり手を問うのである。その声にうんざりして、なぜこのように勝負手にこだわるのかと疑問に思っていた時、ふと気付いたことがある。それは、ある勝負の実態に言語表現を与えようとする場合、説明者はまずイメージのパターンをもたなくてはならないこと、そしてそれにあわせて力士の動作を表現する以外には説明する手段をもっていないことである。彼は事実をみているのではない。彼のもつパターンによって瞬時的に事実を再構成しているのである。そのパターンの豊富さ、かつ内容に応じてその枠組を変更できる自在さ、それらによって解説者はアナウンサーの見落しているハリ手、体の変化、手の位置、勝敗の機微をみている。そして、スローモーション・ビデオによって勝敗が再生される時、われわれは、解説者の認知の正確さに驚くのである。

産業行動学における実験の第一の目標は、この解説者のもつような認知能力の獲得にあてられるべきである。それは、力士の稽古の習練に匹敵するであろう。また、彼らの力士としての日常生活のうちにおのずから形成されるひとつの「勘」の養成にもあたるであろう。これらを獲得する場として実験の意味が存在する。

別の例を引こう。鳥の剝製は、鳥の生態そのものではない。しかし、鳥の剝製の観察とその解剖学的知見とによって、はじめて鳥の飛ぶ姿がわれわれにみえてくるのではなからうか。われわれの実験は、まさしくこの剝製にあてはまるのである。すなわち、われわれに必要な剝製は、部屋を装飾する華麗な鳥のそれではない。飛翔という事実をおさえるのに最も適した鳥の剝製と解剖の知識である。

結局、産業行動学における実験はシミュレーション実験ではあり得ない。それは、現実の作業の微分ではない。したがって、そこから得られた結果を積分しても現実には再生されない。このような認識のもとに立ち、実験的手法を活かし、作業者の基本的人間像を明確にし、そこで得られた結果を現実に還元することが重要であろう。

IV 労働を内側から捉える方法について

—S. Weil の「工場日記」について—

前節に述べた鳥の飛ぶ姿を捉える方法を比喩として考える時、ただちに浮かんでくるのは莊子によって描かれた鵬の姿である。鵬は南冥に移ろうとする時、翼をひらいて三千里にわたる水面を撃ち、扶搖を搏って九万里の高さに上昇する。そして飛び続けること六ヶ月、はじめて目的地に達して憩うのである。蜩と小鳩はこれを嘲笑する。莊子は、このやからにどうして大鵬の心がわかろうかと嘆く。

産業行動学の研究対象である人間は、鵬のような孤絶した巨人ではあり得ない。どこにでもある「われらの町」を形成する普通の市民である。同じ莊子の文中でも「はや」という小魚の例のほうがよりふさわしい比喩となるであろう。それは、いわゆる「濠濮」の間の想である。

莊子「はやがのんびり泳ぎまわっている。これこそ魚の楽しみである。」

惠子「きみは魚でないのに、どうして魚の楽しみがわかるのか。」

莊子「きみはわたしではない。どうして、わたしに魚の楽しみがわからないことがわかるか。」

惠子「わたしはきみでないから、もちろんきみのことはわからない。きみも魚でないから、きみにも魚がわからないはずだ。」

莊子「根本的な話にもどろう。きみはわたしに魚の楽しさがわからないというのは、わたしの心が魚の楽しみを知っていることを知った上での問いかけである。したがって、この濠水のほとりに立つだけで、魚の心がわかって不思議あるまい。」

この問答の主旨は、実在と認識の関係の問題であり、実在の真相は言葉や議論を越えた境地で自然に体得されることを立証する莊子一流の考えが端的に表われている。

しかし、産業行動学の立場からみれば、なんと愚かしい問答であろう。試みに、最初の莊子の眩きを次のように替えてみよう。

「労働者が苦汗に満ちた作業を強制されている。これこそ労働者の苦しみである。」

現代の論壇には、労働者の実態を無視して勝手にそれを創作し、単に頭のなかで資本論から演繹した「疏外論」をこれにあてはめる論文が多い。これらの諸論文には濠濮の問答に表われる詭弁・空論からどれだけ進歩がみられるといえるのであろうか。

こういう空虚さに耐えられないからこそ、Weil は工場生活に飛び込んだのである。そして、そこの不幸な条件が労働者のうちにつくりだす沈黙地帯である「島」の住民としての生活を送った。彼女はいわば魚となって魚の生態を体得しようとしたのである。すなわち、いわゆる社会意識の調査や科学的実態調査だけでは捉えきれない労働者の生活、それをみずか

ら体験し、科学の明らかにできない部分を内側から照そうとしたのである。Weil の仕事をわが国にいち早く紹介した加藤の「新しい人間という問題¹³⁾」, 「シモーヌ・ヴェーユと工場労働者の問題¹⁴⁾」は、この問題と対決した彼女の成果を讃える頌歌であった。

シモーヌ・ヴェーユの証言は、労働者のある生活のおそらく唯一の証言であるが故に、今も無限に貴重なように思われる¹⁵⁾。

しかし、彼女の努力ははたして成功したのであろうか。彼女は、かつての工場生活の経験を回顧して次のように述べている¹⁶⁾。

「もしも、外部から来ただれかが、これらの島のひとつにはいり込み、限られた時間の中ではあるが、不幸がその身に浸透してしまうまで進んで不幸のもとに身をおくとしても、そして、そこがなにか経験されるかをのちに語るとしても、その人の証言には容易に異議が申し立てられることになるであろう。いつまでもそこにいる人たちは異ったことを経験してきたのであるといわれるであろう。内観法だけに依存したり、観察のみに依存していた場合は、そういわれてもしかたがない。」

彼女は、魚になることの困難さを熟知していたのである。彼女は、普通考えられているような単純な体験主義者ではないのである。

「しかし、自分がほかの場所から来て、やがてほかの場所に戻ってゆくこと、ひとりでそこに旅行していることなどを忘れることができ、そして自分自身で経験したことを人びとの顔つき、眼差し、自分、態度や言葉また大小の事実のうちに読み取ったことと、ずっと比較することができるものならば、その人のうちにこれは確かであるという感じが生れるのである。しかし、残念なことには、それを他人に伝えるのはむずかしい。」

この「他人に伝えるのはむずかしい」工場生活の体験とは、次の引用に先立って彼女が述べている不幸のつくる沈黙な状態である「島」のことであろう。「不幸を識ることほどむずかしいことはない。それは常に神祕である。それはギリシャのことわざにもいうように、不幸は語らないのである¹⁷⁾」。

その「不幸」の実態を捉えようとする試みが彼女の主要テーマであり、また悲劇の基盤であった。彼女の「工場日記」の中に執拗に繰り返されるルフランを次にあげよう。

「ひどい疲れのために、わたしは、工場に身をおいているという本当の理由をつい忘れてしまうことがある。こういう生活がもたらすもっとも強い誘惑に、わたしもまたほとんど打ちかつことができなくなってしまう。それは、もはや考えることをしないという誘惑である。それだけが苦しまずにすむただひとつの、ユニークな方法なのである¹⁸⁾」。

「ものを考えるのをやめなければならないということの屈辱感を、心の底から感じる。それでとうとう、わたしもいくらかはやく進められるようになった。(最後には、一時間に三フラン以上はやくなった)。しかし、心にはにがいしこりが残った¹⁹⁾」。

Weil が「自分がなにをしているかわからないでいららす」と同僚 Mimi に語った時、Mimi の答えた言葉を Weil は次のように記録する²⁰⁾。

「わたしたちを機械だと考えているのよ……だれかほかの人が、わたしたちに替わって考えてくれるのだから」。

Weil はつけ加える。「これはまさに、Taylor の言葉である。ただし、深い悲しみを伴った」。こういうにがい想いの間に描かれるのは、単調をきわめる日々の生活である。

例えば、Renault 工場にて

「14日（木）——2240個、9時半終了、（部品がなくなった）——そのうち7時まで1400個、以後840個（4時には330個しかできていなかった。はげしい頭痛。疲労困憊ということではなかった……²¹⁾」。

このような、作業速度やノルマの課題、そして頭痛、痛み、吐気、食欲不振、不眠等、それに加えて仲間たちのデッサン——以上が彼女の日記を構成する主な事実である。そして、こういう断片的記述に終わった最大の原因は、先に述べた「もう考えることをしたくない」という誘惑と大きな関係をもっている。

いったい、人間の真の生活感情を、正確に、みずから確認し、もしくは人に伝達することができるものであろうか。すなわち、Weil は日記において、真の労働者の姿をはたして正確に感じとり、かつ、記録し得たのであろうか。わたくしは、ここで、労働者の生活感情を把握しようと試みた、欠陥の多いわたくしのむかしの論文²²⁾に言及せざるを得ない。それは労働者の生活感情をあつかったものであるが、体験の内省の妥当性という問題において Weil とある共通性を含むように思われるので、あえてここに記述する。

労働者の生活感情（体験）の内省記録についてわたくしは次の結論を出している。

1. 被験者がある時間について想起、記述した全体的な感情（体験）というものは、単なる Kundgabe であって、現実の感情（体験）とは同一のものではない。

2. 感情（体験）を意識する場合には、人は一時的にせよ、その場の緊張から逃れ、別の構えとなっていなければならない。すなわち、生きた感情（体験）の把握は不可能である。

これは、Weil の苦しんだ問題点でもあった。事実を把握するためには考えなければならない。しかし、彼女の飛び込んだ生活は、絶えず「考えることをやめなければならない」ことを強制する工場労働である。魚になってしまうと人間の言葉は使用できなくなる。そこでは内省 introspection による感情（体験）の表現は不可能になってしまうのである。

この問題に対してわたくしが出した結論は、常識的な考えかたとは逆の論理であった。すなわち、感情（体験）とは、「全生活を背景とし、瞬間的部分的な感情の意識を刻印として浮き出てくるひとつの力動的全体性を有するもの」と規定するのである。ということは、感情（体験）とは、回想 retrospection によって捉えられる、むしろ、それによってのみわれ

われのうちに構成される非客観的な存在であると考えるのである。そして、そのゆえにこそそれは強い現実性をもっているとするのである。したがって、感情（体験）の内省による記述は必ずしも客観的ではないが、そういう感情（体験）をもったという意識は、強い現実性をもってわれわれの生活の基盤を形成するものである。まことに、人間はイメージをもつ天才である。非客観的なものを客観的なものとして思い浮かべ得る特殊な能力をもっている。それが Weil のような極限的人間の場合に特に明白に表われるのである。

このわたくしの考えにしたがえば、女工生活を終えた後で工場生活を回顧した Weil の筆のほうが、彼女の「工場生活」の「現実性」を写して、その「日記」よりも精彩を帯びるのが当然であろう。例えば、次の文をみよう²³⁾。

「そして、日曜の午後、心に浮かぶのは1日ではなく、1週間全部であり、未来はあまりにも暗い、あまりにも重苦しい何かで、その下で思考は屈折する。」

この文章はまさしく、retrospection による感情（体験）の把握の実態を示す言葉ではなからうか。

このような把握がひとつの固定観念を生みやすく、その視座のもとで労働者の生活が再構成されることはやむを得ないであろう。それは、実験の解釈における実験者効果、被験者効果のごとき影響力をもっている。実験者効果とは、被験者が実験者の意図を忖度し、その期待通りに行動することをいう。また、被験者効果については、Tajfel は Rosenthal や Jacobson, Katz 等を引用し、次のように述べる²⁴⁾。「被験者効果とは、被験者の行動が行われる理由について、あらかじめ実験者の予期した通りになると思わせる効果であって、これによって実験者の結論が公式化される。」

Weil の行ったのは、ある意味で社会心理学的実験である。そこには、特に被験者効果が歴然として作用していたとみるべきであろう。

わたくしが、第Ⅲ節で設定した問題点が彼女の労働把握の場合にはっきり読みとられる。すなわち、工場労働者の実態を知ろうとする際に彼女のうちにはその認知がかくあるべしと予見されるような強い *Bereitschaft* が存在していたのである。それは、彼女の生涯をつらぬくものであって、晩年の有名な逸話に端的に表われるものである。

Weil は、第二次大戦の末期、ロンドンにいたが、彼女の心はフランスの人びとの苦しむ心になり切っていたといわれる。彼女は、自分の肉体が極度に衰えたことを知っていたけれども、本国の人びとの食べていないものを口にするのを拒否し続け、死んでいった。崇高な行為であるが、彼女の強烈な *Bereitschaft* を端的に物語る挿話でもあった。本国の人びとは、「食べていないものをそれでもなんとか口にしよう」と必死に努力していたとみるべきである。いや、そのために起きた骨肉相争う生存競争から生じた傷痕を、わたくしは現地で観察したことがある。第二次大戦中われわれの多くがそれを体験したことは、まだなまな

ましい記憶として残っている。彼女の *Bereitschaft* がもつ激しさは、こういう人間の事態をも見逃してしまう「大義」という性格をもつものであった。

Weil の描いた「本国の人びと」は、はっきりといて、彼女の幻想が生んだ実在し得ない人びとである。同じように、彼女は、工場労働者の「悲惨さ」を物語る以外のすべてに対して目を閉じていたのである。

元来、労働者の作業中における感情は、はなはだ精彩に欠けている。それは、労働の場の外において、拡散し、人間らしい色どりをそえていく²⁵⁾。彼女は、その人間らしさをみつめる視座をほとんどもたず、もっぱら、労働の苦しさという彼女の観念に現実をあわせていたようである。「工場日記」に表われる女たち、男たち、いずれも、作業と関連されてのみしかみられていない。そして、彼らの工場外の家庭生活、いや人生そのものに対しては、「日記」には、知識人としての軽蔑あるいは嫌悪の情がありありと表われているだけである。仕事は仕事である、あとは自由である——その自由の時にいきいきと復活する人間の哀歎について彼女は盲目であった。

彼女の「日記」に登場する労働者の多くは、工場の中で、すでに自分を殺してしまっている人たちである。例えば、工場に入った第1週の土曜にでてくる女工たち²⁶⁾。

M^{me} Forestier

Mimi

Eugenie

Lousette

……

この人たちの工場での卑屈な像は、時たま「日記」のなかに描かれる。しかし、工場の生活に耐えながら、彼女たちがもっていた生活の重さは、Weil の視点から逃れていた。「日記」を読むものは、容易にそれを看得できよう。

これらの労働者は、職場においてのみ抑圧された人間である。それを真実の全体的人間としての労働者と誤認したところから、晩年の彼女の思想と生活の荒廃が生じたのである。もっとも、多くの人びとは、わたくしの考えるようには彼女の後期の思想を悲惨なものとも不毛なものともみていない。むしろ、彼女の宗教に深い敬意を払われているようであるが、これらについてはまたの機会に論じたい。

彼女の「日記」は、労働者を内側から捉える方法の破綻を意味するように思われる。そういう薄弱さがある種の透徹さを生み、逆に強固な印象を与えるのであろう。

1957年、加藤は次のように書いている²⁷⁾。

「私は今度九州の炭坑を訪れたときに、そこで見聞きするあらゆる問題について、彼女の言葉を想い出した。そうした想い出すことがどれほど有益かということをも身をもって知った。

単なる旅行者にとってでなければ、その意義はもっと大きいはずなのである。

「単なる旅行者」は、もちろん、前掲の Weil の文を受けている。

加藤の「思い出」は、なんと貧困な地盤の上での「思い出」であろう。なにゆえに、加藤は、日本の現実の労働者の生活を浮きぼりにし、その大地の中から新しい問題をくみとろうとしなかったのであろうか。「労働科学」第1巻(1920年)の冒頭は、暉峻の紡績労働の凄惨な記述から始まっている。最近の「労働科学」に収められた斎藤をはじめとする一連の「単調労働の研究」²⁸⁾も、同じ系譜をひき、労働の現場をいかに捉えるかという気魄に満ちている。これらの論文が出現する間に日本の良心的な労働科学者、あえていうならば産業行動学者たちによって書かれた多くの論文を読んでみよ。「唯一の証言」は、Weil だけのものではないのである。産業行動学に限ってみても、その苦闘してきたゆえんは、労働に対する「多面的な証言」をつくりだしたいという願望に基づいている。これらの努力を無視して、どうして日本の学者たちは、外国の分裂症的な人間の体験談に熾烈な讃歌を送るのであろうか。

加藤がこの痴呆的頌歌を謳っていたころ、わたくしは、かつてパリでポリショイ・バレーをみた時の感想を次のように書いている²⁹⁾。

「ところが、ジゼルが出る最初の場にはガンとさせられました。明らかに老齢というのはわかるけれども、青葉のもえるようなうらわかさがウラノワからこぼれておりました。目をこするようになってみても、本当にジゼルその人が、ウラノワによってたくみに創り出されておりました。……劇場がはねてから、陶酔感に身をまかせて歩きまわった夜は、忘れられません。もっとも、私が日本人として非常に幸福に思いましたのは、かつての梅若万三郎にしろうじておよぶ芸がここにあったという感想をつけくわえることができることでしたが。」

日本の文化を熟知していない人間に他国の文化がどうしてわかるのであろうか。日本の労働の現実を知らない人間に、他国の労働者の体験がどれだけ痛切にひびくのであろうか。九州の炭坑地区で長期間実態調査に従事していたわたくしには、Weil を思い浮かべることが想像することもできなかった。ただ、そこに働き、生活する労働者とその家族の哀歎だけが身に沁みだ。

いわゆる「森有正問題」も、実にここから発生する。フランス人になりきらなければフランス人の思想がわからないと信じこんだ森のおぞましい諸著作を読んでみよ。退屈をきわめた言葉の乱舞以外、なにがそこに存在するといのであろうか。魚の心をわかるために魚になろうとして、人間の言葉を忘れたてた痴人の囁語しかそこにはみられないのではないか。

Weil の最晩年の著作、Venise Sauvée³⁰⁾ は、軍隊の暴動から美しい Venise を救うために、逆に国家と同志への二重の裏切者とされてしまう悲劇である。この悲劇こそ、労働者の真の姿をみきわめようともせず、しかも、労働者を救おうとして崩壊した彼女が無意識に描

いた自画像にはかならないのではないか。

なぜ、彼女はこういう悲劇に陥ることになったかという、まさしく、彼女の固定した視座にその原因があったのであろう。

ここで、前節と結びつく問題が生じてくる。彼女は、労働をシミュレートした像をつくろうとしたのである。しかし、それは根本的なあやまりであった。実験は、現実をさらに精細に分析する手掛りとして使われるべきである。彼女は、その実験にあたる自己の体験を分解し、反省し、柔軟に視座を転換することができなかった。そして逆に現実をみずからシミュレートした労働者の像に合致させ、固定化してしまい、荒涼とした道を歩いていったのである。これが彼女の失敗の原因であり、今問題としている方法の根本的欠陥を示すといわなければならない。

V ゆるぎない視座

——鎌田慧のルポルタージュ

「巷の安酒場で、時に騒ぎ、時に沈みつしている、どこにでもいるようなおっさんの悲しみと希いの切なさが、その背景の深刻さとともに、胸を叩くようなレポである。」

このように大野によってある週刊紙にレビューされたのは、鎌田の「逃げる民」³¹⁾である。それは、労働の悲惨さのみに視座を定めた Weil の記録よりもさらに幅広い立場から、労働者の哀歎に満ちた勤務外の、あるいは、出稼ぎの後での生活を辿って記録した労作であった。その意味では、この著作は、Weil に対しわたくしの述べた不満をある程度解消するに足るように思われる。

しかし、みずから季節工の一員として工場に勤務し、その体験を精細に叙述した彼の一連のルポルタージュを読むたびに、わたくしの胸の中に再三起ったのは、これは、すでにわれわれの知っていることの叙述にすぎないのではないかという抜きがたい疑問であった。たしかに、彼の著作は現在の都市と農村の間をさまよう労働者の一面を尖鋭に浮きぼりにしている。しかし、それを描くために、彼の大いなる捨身行の体験がはたして必要であったのであろうか。

おそらく、この執拗な疑問がわたくしに生ずる理由は、一見、事実そのものの記録にみえて、その実は、そこを貫ぬいて厳として存在している鎌田の明確な視座の存在に基づくのであろう。みようとすもの以外はみられない——これがわれわれの社会的知覚を貫ぬく鉄則である。おそらく彼の労作のうちに、彼の与えたいと意図した印象だけを強制される感じ——このゆえにわたくしに前述の疑惑が生じたのではなからうか。

「逃げる民」に先立って、「自動車絶望工場」で述べられたひとつの文章³²⁾が、わたくし

の疑問に対して肯定的な答えを与える。それは、コンベア労働に関する彼の見解を述べた部分である。

「これは労働かもしれないが、何も作らない。作るのは機械であり、コンベアであるだけだ。労働者はただそれに、黒いカーテンの内側で死んだように眠ってようやく蓄えたエネルギーを入力させるだけ、吸収させるだけだ……」。

「そうである以上、たとえばコンベア速度を5秒遅くしたとしても、それはそれだけ楽になることは事実であろうが、労働者がそれに馴らされてしまった後では、なんの解決にもならない。ミッション (Transmission, 変速装置のこと) は、戦時中、トロッコに乗せて運ばれ、ボルトは一本一本、ボックス型のドライバーで締められていたという。その時は確かに牧歌的であったであろうが、果して楽しいものだったろうか。またもし、作業の幅を拡げたり、ある程度生産のスピードをチームの裁量に任せたとしても、「ミッションを作っている限りいっしょ」なのだ。そのどちらにしても、機械によって作られて、与えられた部品の範囲内で、決められたとおりにただ組み付けることに過ぎないからだ。自動的に回転する生産手段としてのコンベアは、「生きた労働力を支配し吸収する死んだ労働として」、「労働に対する資本の権力」(『資本論』)として労働者を支配していることに変わりがない。

この鎌田の感想は、第Ⅱ節に引用したわたくしの実験結果とよく一致している。5秒ほど(わたくしの実験では10秒であったが)のおくれは、特に余裕時間ないしは手待ち時間の大幅な増加を惹き起すものではない。また、被験者は、ただちにといてもよいようなはやさで、新しい作業時間に即した動作時間の配分を無意識のうちに行ってしまう。さらに、「スピードの裁量をチーム(わたくしの実験では各個人であったが)に任せた」としても、その効果は第Ⅱ節で図示(第1～4図)した実験のみでは必ずしも否定できないが、同時に別の論文から引用した第5図や文章の示す通り、むしろマイナスに作用する場合もあった。そして、その論文で述べたわたくしの「それは、……同一の規制作業に、自己調節とは呼ばれるけれど、真の自己調節とは無関係に近い、しかも、心にひっかかる膨大な課題を与えられた作業に変換しているのである」という言葉は、「機械によって作られて与えられた部品の範囲内で、決められたとおりにただ組み付けることに過ぎない」と鎌田のいう通りに書きかえてもさしつかえないように思われる。

鎌田の現実体験に基づいて発せられたこれらの言葉は、単調作業、特に第Ⅱ節で言及したコンベアによる単調作業の本質に関する「貴重な証言」であることは確かである。その卓越した認識に敬意を払うのは当然であるが、その敬意にもかかわらず、わたくしに再三起された疑問の主調は、この本の「あとがき(ベルトコンベアについて)」に述べられた次の言葉³⁸⁾からある種の正当性を得ようである。

「電機工場の女子労働者に会った時、かの女は、「ベルトコンベアは見ているのと、実際

仕事をしているのではスピードがちがう」といった。この言葉はぼくを強く打った。それまで取材で何度かコンベア労働は「見てゐた。そしてそれに従事している労働者たちの話も聞いた。しかし、ぼくはその時何を理解していたのだろうか。「単調労働」「単純反復作業」などの単語の中に、実際労働している人の、精神的肉体的疲労感が、その絶望的な飢餓感がどれだけ含まれているのか、それは見聞きするだけでは、「理解」できるものではなかった。日々の無限の繰り返しの労働の中でこそ、ようやく、ベルトコンベアの悪を捉えることができるのを、六カ月の体験の中で初めて知った。

ここでわたくしの問いたいのには次の問題である。わたくしは人間の調整能力やコンベア作業のもつ本質的な悪について、10回程度の、いや4回ほどの実験で十分に認知し得たのである。しかるに、どうして彼は「その悪を捉えることができるのを、六カ月の体験の中で初めて知った」のであろうか。

これは傲慢な問いかけと批判されてもしかたがないであろう。額に汗し、身を削いで働いている労働者の実態を無視し、実験室の些少の実験を行い、後は安楽椅子に坐している心理学者の思い上がった発言でしかないといわれても抗弁できない面がある。しかし、実験者としてのわたくしには、それなりの言分がある。それは、わたくしの実験においては、絶えず、みずからの視座の固定化を避けようとする研究方向の激しい変換があったことである——少なくとも自分ではそのように自負している。それゆえに、結果は、むしろ予想していた条件のもつべき意味を否定し、それに逆の意味を与えることになったのであった。これに対して、鎌田には、その悲痛な経験に基づく確固としてゆるぎない視座が存在している。それは固定化した視座である。このことは、先にあげた彼の文章の中に執拗に繰り返されている「資本論」からの引用によっても容易に推定されるであろう。彼の視座は Marx によって与えられた絶対的なものである。鎌田みずからも「自動車絶望工場」を書こうとした意図について、「逃げる民」の中で「三年まえに出版した「自動車絶望工場」は、そんな本になるはずだった」と述べて、少しさかのぼったところで、次のようにその目的を語っている³⁴⁾。

「……合理化が進行する工場の歴史と、解体してゆく農村の歴史を、ひとりの労働者の都市と農村の往復運動のなかからとらえてみたい、とおもったのである。工場の求心的な合理化と外延的な開発にあらわれる、現代における資本の運動を、出稼ぎ労働者の生活に刻まれたものからひろい出す、そういつてしまえば図式的すぎるかもしれないが、そう考えたのだった」。

彼の視座は、まさしく「資本の運動」に指向していたのである。彼は不幸にも「現場のコンベアの運動にしがみついているだけで、全エネルギーを消費してしまった」³⁵⁾ため、そういう「資本の運動」を捉えるに不十分であったと嘆いているが、彼の「自動車絶望工場」は、「資本の運動」のもとにある季節工のみごとなルポルタージュである。さらに「逃げる民」は、

肥大する都市と疲弊する農村の間を彷徨する農民の姿を描いた傑作というべきである。わたくしは、これらの著作に深い敬意を表するが、先に述べたことと軌を一にする疑問をもう一度繰り返さざるを得ない。ゝなにゆえに、彼は、われわれが実験によって容易にたしかめ得た事実を体得するのに6カ月を要したか。また、われわれの研究目標は、まさしく彼の描いた出稼ぎ労働者に代表されるわが国の労働の実態にたち、そこから出発しようとしているのに対し、なにゆえに、彼のルポルタージュはわれわれの立場を無視して、今のかたちでのみしか発言されていないのであろうか。

そして、その答えは簡単である。すなわち、ベルトコンベア作業の性格にせよ、ゝ資本の運動、にせよ、固定した視座のもとで体験的にその本質をつかむためには多大の時間が必要であるからである。彼はそれをやりとげた。しかし、そのいずれもがわれわれにとっては既知の認識であった。したがって、われわれは彼の指摘から加えるべきなものをももち得ないのである。

彼の「わが幻影工場地帯」は、ゝ高卒で上京するとき、大企業にも、中企業にも入れず、ようやく町工場に入れた男たち、そして、ある種の偶然によってひとたび手にした「就職」は、こんど逆転して、彼の一生を支配してしまうことになる。³⁶⁾という惨憺とした現実を体験した人の自伝を構成している。現実の機構を知らずに、現実にふりまわされるままに生きざるを得なかった彼が一般大衆の凄惨な生活歴を説明し得る唯一の合理的な解釈——それはまさにゝ資本の運動、のひとことにつきよう。その言葉の重みは、ゝ通常の職業、とりわけ職種を「自由」に選択できた人、³⁷⁾といわれてもしかたのない研究者のそれとは決定的にことなっているのである。彼は、自分の経験をもっぱら現実の問題としてとりあつかっているのである。しかし、ここにみたびよみがえってくるのは、Weilの次の言葉である。

ゝそして、もし自分が他所から来て、いずれ他所に帰るであろうということを、そして単にそこに旅行しているだけだということを忘れるまでになって……

旅人として職場を放浪したWeilは、そこで失敗したのである。彼女は、自分では悲痛なまでに労働者とのidentificationを主張した。しかし彼女は、自分にとっては現実的と思われる描写を行ったつもりであるが、産業行動学の立場からみると客観性に欠く叙述へと追いやられたのである。同じように、ついには旅人とどまらざるを得なかった鎌田のルポルタージュは非常に現実的であるが客観的であるとは必ずしもいえない事態の把握に導びかれたのである。彼の体験は貴重である。しかし、常に客観的事実の上に科学を構成しようとする産業行動学の方法論としては、致命的な欠陥をもっている。もとより、彼自身は、自分の仕事は産業行動学の研究法であるという意図を全然もっていなかった以上、こういう批判は、完全的に外れである。むしろ、わたくしがあえてこういう批判を行いたくなるような迫真性——そこにこそ鎌田の光栄があるというべきであろう。

しかし、わたくしの立場としては、次のひとつの言葉のほうが彼の精細なルポルタージュよりも印象的である。

「あんたらには、わかんないよ、わかりっこないよ。」

「新風土記」の記者が常盤炭坑の過去の労働について取材中、地下労働者として生き抜いた老人が、記者に終始繰り返した言葉である。この凄惨な労働の体験者は重い口を開いて次のように語る³⁸⁾。

「終戦直後まで、おれはキンタマ出して石炭を掘っていたよ。坑内が熱いわけよ。……湯は63度もある。……おれたちは素っ裸で、ゴム長の中に水を入れて口をふさいで、切羽へ走って行って二・三分掘るだけだ。すぐ逃げて来て、パーンと水箱に飛びこんで、頭まで水につかって、グーと体を冷やしてからまた切羽へ走るわけだよ。……だから一時間掘るのに四時間ぐらい休憩するわけよ。そうしなきゃ死んじゃうんだ。」

どれだけの人が彼のこの言葉から暗鬱をきわめた炭坑作業のイメージを再生することができるであろうか。おそらくここにひとつの過酷な労働があったという強烈な驚きにはうたれるであろうが、暗黒、静寂、そして濛々とした湯気の中に幽鬼のように働く彼らの鮮烈なイメージは到底浮びあがらないであろう。わたくしは、かつてこの坑内で、彼らと同じように、素っ裸で、作業の実態調査を1週間行ったことがある。はじめ素っ裸で、坑内に入るようにいわれた時、その意味がわからずに茫然としていたことが今なお思い出される。結局、水風呂に入る回数を頻繁にせざるを得ないことを体験して、はじめてなるほどと思ったのであるが。記録中、全身、特に、ほほ、はな、あご、腹部等の突出部がすぐ赤くなってしまう。そして汗が吹き出してくる。坑外に出た時、わたくしの記録用紙は汗でぐっしょり濡れて、判読することは容易でなかった。それを苦心して解読し、彼らの実働率は18%であると計算したことがある。この実働率は、先に引用した彼の述懐の内容とよく一致している。「どうして人間はこんな過酷な労働を行わなければならないのか、——これが当時私の胸中を去来した思いであった。そして「新風土記」の中で思いもかけずその労働者たちの一人である彼の最初にあげた言葉を見出した時、その内容の説明を待たずに突如として彼らの凄惨な労働のイメージがわたくしの脳裏に湧き起ったのである。まことに百聞は一見にしかずである。

常盤炭坑は昭和46年に閉山した。今は、常盤ハワイアンセンターとなっている。炭坑変じてレジャーセンターとなったのである。そこをルポルタージュした東海林の「東北のフラ娘たち」³⁹⁾は、こういう大変動を経過した労働者たちの哀歎を、特に歎に力点を置いて巧みに物語った名文である。しかし、歎といっても「面白うて、やがて悲しき、歎ではあるが。

そして、たまさかにしかこういう記録に表われない無告の民、その現実を直視しそのイメージをもつことが産業行動学の原点でなければならない。いやしくも、産業行動学者たるものは、ひとつの職業名をあげられた場合に、それに従事する人びとの作業と生活とをありあ

りと視覚化し、映像化することが可能でなければならない。それを可能とするものは、実験で鍛えられた柔軟な視座による行動の客観的分析であろう。それさえできるならば、Weil や鎌田の記録には敬意を払いつつそこから遠ざかってもしつつかえない。いや、決然として遠ざかるべきであろう。

Ⅵ む す び

シミュレーション実験が、現実の事態を理解する方法としてはあまりにも貧困であることは、第Ⅱ・Ⅲ節で述べた通りである。しかし、それが現実の工場労働に比べて幻想的な場面しか構成し得ないことは事実であるとしても、実験自体が厳として生きた人間の行動をあつかっていることだけは間違いない。むしろ、そこから、現実事態を解明し得る視座が得られるのは当然である。これに対し、Weil たちのように労働者を内側から捉えようとする方法のほうが、一見客観的にみえて、みたいもののみをみるという視座確定の結果を生み出す危険性をもっているのである。しかし、それは客観的ではないかもしれないが、襟を正して聞くべき現実的な体験である。この現実的なものから真に客観性へと辿る道を見出すのは必ずしも不可能ではない。

そして、おそらくこの二つの極端な方法の長短を認識しつつ、これらを自在に自己のものとして駆使するところに産業行動学の方法の真価が存するのであろう。すなわち、常に事態に応じて変換し得る実験者の視座、自分の視座を常に制御しつつ柔軟に対象を解析し得る実験の精神、絶えざる現実への回帰による事実の確認、これが産業行動学の本質的な方法論となるのであろう。いや、それは人間科学全般の方法論につながるのかもしれない。

この一見精神主義的な発言にもっと具体的な内容を与えていくことが、今後のわたくしに与えられている課題である。

文 献

- 1) 狩野広之、人間科学における実験について、労働科学、49巻12号、1973、725
- 2) ブラメスフェルド・グラーフ著、樋口伸吾訳、人間の生理と心理からみた作業研究、1959、日本能率協会、特に次に引用する訳者序文参照。

また、グラーフ氏の独特の表現として、ここに作業準備性と訳しておいた *Leistungsbereitschaft* なる言葉がある。わたくしは、文脈上、これは *readiness for work* を意味すると思ったし、同研究所のシュミディッケ氏も、それがいちばんいい訳語だと賛成してくれたけれども、グラーフ氏は、断乎として、それでは彼の意味するところとちがうと主張してやまない。強いて英訳すれば、それは *physical disposition* と *mental willingness* との協同した *working promptness* であって、*working capacity* と対立する概念であるといわれる。しかし、氏が苦心して作ってくれた、この英語にも、また、適切な日本語訳がつけられそうにもない。さらに内容を検討して、2時間へたな会話を汗をしばり、結局、この言葉は翻訳できない、独自のニュアンスをもっているという結論になってしまった。翻訳不可能と知りつつ、翻訳を公にするのは辛いこ

とである。読者は、ほかの REFA の文献とともに、翻訳ではあらかわせない著者たちの意図をくみとられたい。

- 3) K.F.H. Murrell, *On the Validity of Ergonomic Data*, *Occp. Psychol.*, 42, 1968, 71~76
- 4) 樋口伸吾, 作業速度の変化が成員の行動に与える影響について, 大阪大学人間科学部マルチ・メディア研究班, 1976, 101
- 5) 樋口伸吾, *ibid* 102
- 6) 斎藤茂男, 我が亡きあとに洪水はきたれ, 1974, 現代史出版会, 230~231
- 7) ソルジェニツイン著, 木村浩訳, 1976, 収容所群島, 新潮社, 471~475
- 8) 樋口伸吾, 再生と再認, 神戸大学文学部紀要 2, 1974, 2~3
- 9) 樋口伸吾, 最近における知能測定の研究, *教育心理* Vol. 18 No. 3, 1970, 212~216
- 10) 樋口伸吾, 教育評価, 1956, 共立出版, 78~88
- 11) 樋口伸吾, 作業速度の変化が成員の行動に与える影響について, 大阪大学人間科学部マルチ・メディア研究班, 1976
- 12) Morris R. Cohen, *Reason and Nature*, 1931, New York, 77~78
- 13) 加藤周一, 新しい人間という問題, 現代ヨーロッパの精神所収, 1959, 岩波書店, 80~106
- 14) 加藤周一, シモヌ・ヴェーユと工場労働者の問題, 現代ヨーロッパの精神所収, 1959, 岩波書店, 195~212
- 15) 加藤周一, *ibid* 211~212
- 16) Simone Weil, *La condition ouvrière*, 1951, Gallimard, 252
- 17) Simone Weil, *ibid* 251
- 18) Simone Weil, *ibid* 51
- 19) Simone Weil, *ibid* 66
- 20) Simone Weil, *ibid* 76
- 21) Simone Weil, *ibid* 97
- 22) 樋口伸吾, 労働者の生活感情に関する研究 I, *労働科学*, 26巻 3号, 1950, 97~101
- 23) Simone Weil, *ibid* 241
- 24) Henri Tajfel, *Experiments in a Vacuum*, in Israel, T and Tajfel, H (ed.), *The context of Social Psychology*, 1965, Academic Press, 85
- 25) 樋口伸吾, 労働者の生活感情に関する研究 II, *労働科学*, 26巻 5号, 1950, 202~207
- 26) Simone Weil, *ibid* 36
- 27) 加藤周一, *ibid* 212
- 28) 斎藤一他, 単調労働に関する研究 I, *労働科学*, 45巻12号, 1969, 同 I, *労働科学*, 47巻 5号, 1971
- 29) 樋口伸吾, 教育の目標としての鑑賞, *教育評価*, 5巻 5号, 1959, 2
- 30) Simone Weil, *Venise Sauvée*, 1955, Gallimard
- 31) 鎌田慧, 逃げる民, 1976, 日本評論社
- 32) 鎌田慧, 自動車絶望工場, 1973, 現代史出版社, 129~130
- 33) 鎌田慧, *ibid* 256
- 34) 鎌田慧, 逃げる民, 1976, 日本評論社, 263
- 35) 鎌田慧, *ibid* 263
- 36) 鎌田慧, わが幻影工場地帯, 1976, 風媒社, 265
- 37) 鎌田慧, *ibid* 265
- 38) 酒井寛, 常盤炭坑, 新風土記, 1975, 朝日新聞社, 73~78
- 39) 東海林さだお, ショージ君のつばん拜見, 1971, 文芸春秋, 141~154

RESEARCH METHODS FOR THE STUDY OF HUMAN BEHAVIORS IN INDUSTRY

SHINGO HIGUCHI

After he experimented psychological researches on simple task of a belt conveyer, Kano had reached to the great doubt of the experiments which were simulated by practical task. The most difficult problem is put where it is impossible to find the experimental task equivalent to the nature of the original task, because of the difference which is between workers' set and the one of subjects in laboratory. In remembering of the experiments which he took himself, he said, "I cannot forget even now so gloomy feeling of that time, because I could not understand why our adults must perform a sort of childish play."

The author set up the conveyer in laboratory and began to experiment the task of paced work and free work with rigid consciousness of Kano's gloomy feeling. Its object was easy packing. He had the plausible result that free work was more efficient than paced work in fatigue, emotion and productive effect. However, here comes also Kano's appropriate suggestion. There was made only the experiment which was apart from the practical work, but tracing back from it its result cannot be applied to the practical work.

Similarly, Murrell's critique, which pointed out the problematic aspect of so-called simulation experiment, was important too. He raised the following six questions about the experiment of ergonomics.

1. inappropriate methods
2. inexact terminology
3. unsuitable subjects
4. faulty presentations of results
5. differing performance in the laboratory and in "real life"
6. insufficiently practised subjects

The author scrutinized the results of his own experiment on the preceding six items and ascertained that any of Murrell's critical indication was appropriate. In the long run he could not avoid agreeing with Kano's saying such as "the simulation experiment in industry is meaningless."

Why did the author take the experiment, though such a conclusion was supposed to be gained probably? Because the author carried his experiment in quite different stand-point of view from simulation experiment. In more words the author's aim is to

examine the point of view to be acquired commonly when the actual practise is objected.

The consensus words of researchers of time study as Tayler were "Begin with the facts." These words appeared to be truism through the studies of human behaviors in industry. However, as the definition of facts is more further difficult than generally has been thought, the acknowledgement of it requires to be trained so much. To put the example, when one looks at the belt-conveyer work for the first time, he is struck dumb by too much hurry of that work. On the contrary those who joined the author's experiment watch the conveyer work of the labourers from the stand-point of view which was learned through the experiment by themselves. They may find some sphere to loose the tension even in that pressing movement at a glance and become aware of how to adjust that grows spontaneously through it. These lookouts scarcely come out from the stand-point of simple "Begin with the facts". The experiment becomes significant only when it is made acknowledged that simulation experiment is meaningless and instead of that it is able to build the angle which can grasp the fact accurately.

Then the following problems float out naturally. One is whether or not the actual condition of labour can be grasped only by the experiment in laboratory. Another is whether the opposite opinion is more important than it. The opposite opinion represents itself in the researchers who become labourers themselves, have the experience to work and try to know the actual situation in industry through their own experiences. Simone Weil and S. Kamata take that side.

The author, at first, followed Weil's experience mainly through her "Journal d'usine". He found that there was an essential barrenness in her sincere experiences, some of which were taken much from her life in the factory. She sighed repeatedly, "the work is too heavy, so I am apt to give up thinking." Labourers, however, have a natural set where they stop thinking. They come to be slightly conscious of themselves through their joys and sorrows of life which are impressed in free hours after the work. As she neglected the fact, she seemed typically to support the opinion that labour was painful. Late in life she stayed in London during the World War II and emphasizing that she suffered the same hardness as French people in her mother country, was almost starved to death. What a noble deed ! Nevertheless, isn't her view of labourers which she persisted to her end just her illusion ? Her main works show a limit of knowledge of labour acquired by one's own experience.

Kamata himself was employed in several factories as a casual labourer and published a good reportage in which he noted the record of his life there.

It is very valuable as the experience. Above all we find a lot of agreement with the author's result of experiment in the sentences where he described the belt-conveyer work. Hence occurs a problem that why he took long six months to recognize the fact that a change in the condition of experiment did never always effect on the whole

manner of behaviors. Though he had taken so long periods to get the conclusion, the author knew the controlling aptitude of man just through a few times of experiment. It may be unavoidable to be said that the above mention sounds contemptuous to honest labourers, however, for a scholar of human behaviors in industry the question cannot be hesitated to be asked. The author examined Kamata's reportage on the focus of this issue and in conclusion gave the interpretation that it rested on his adherent view to try to explain the fact all from "capital movement". His view shows the sharply confronted nature with the author's one to change flexibly in the experimental method. The author's negative attitude to the traditional experimental method as the research method of human behaviors in industry depends on the above reason in spite of his respect for Kamata. The more important ability for the scholar of human behaviors in industry to possess is to visualize the fact; it is to call to the mind in a moment not only his behaviors in working but the images of his all life just from the one occupational term. At last the author cites a mine labourer's words.

"You can't understand us, never!"

This is from a newspaperman's report of a mine labourer who had worked in one of the worst circumstances in Japan. The author, who had done a research of the work there for a week, recalls even now the dismal work of the mine in a vivid image accompanying with his words.

The main subjects of the research method of human behaviors in industry must be to have the vivid image of the practical work, to carry out the experiment of which the view is readily expected to be changed and to circulate back its result to the practical setting.